実践３　ブレーン・ライティング法による事例研究

齊藤　宇開
（知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室）

１．目的

多くの盲・聾・養護学校では，個別の指導計画を作成した上で指導を行っている。その際，教師はグループやクラス単位で，個別の指導計画を検討する場を設けている。しかし，場を設けても，全員の意見を十分に出し合うことができないなど，話し合いの方法を再検討して，よりよい事例研究の在り方を探求する必要がある。

そこで，個別の指導計画の作成の際に行われる話し合い等に際して，ブレーン・ライティング法（目標や課題に向かって多様なアイディアを出し合って，目標や課題を明確化して解決策を導き出すことに有効）を，活用することを提案するために，研究協力校の東京都立港養護学校での事例を紹介する。

２．方法

日時：平成15年６月26日（木）14：00から16：30
場所：東京都立港養護学校
対象：中学部20名（１学年担任４名，２学年担任６名，３学年担任10名）

３学年のみ２グループに分かれ，全部で４グループで実施した。

なお，東京都立港養護学校は，個別の指導計画（本校では個別教育計画）を学期ごとに作成している。また，これまでも，学年ごとに計画を検討するための会議の場を設けている。

東京都立港養護学校におけるブレーン・ライティング法のステップ

第１ステップ	第２ステップ	第３ステップ	第４ステップ	第５ステップ	第６ステップ
テーマを決定 →各グループのメンバーが担任している子供の実態把握	各自でカード，紙切れづくり	グループ編成（4から６人） →4グループ（各学年ごとに構成）	大きな紙に張り出す ①カードを張り出す ②カードを付け加える	カードを分類 ①カード集め ②表札（タイトル）づくり	文章化 振り返り

第１ステップ：テーマを決定

テーマ：「Ａさんの実態について」

テーマを，各グループのメンバーが担任している生徒の実態把握についてとした。

第２ステップ：各自でカード，紙切れづくり

ポストイットを用意し，「対象とした生徒に関して思い浮かぶことを一言ずつ書いてください」と司会が指示した。加えて，のりの着いているところを上側にして，黒のペン，横書きで書くように指示した。一つのカードに一つのアイディアを書くことができていた。その際，できるだけ簡潔に書く必要があるが，単語に近いものから，２～３行の文のものまであった。

第３ステップ：グループ編成

グループは事前に，１学年担任４名，２学年担任６名，３学年担任10名（３学年のみ２グループ）の，全部で４グループに分かれて実施した。

第４ステップ：大きな紙に張り出す

①カードを張り出す

色の付いた模造紙に，カードを分類しながら貼り出していった。その際，一人一人が一枚ずつ順番に出して，自分の一番しっかりくるところに貼るようにした。一枚一枚のカードに書かれた内容を丹念に読みとっていくように司会者が指示した。

②カードを付け加える

他の人の書いたものを見て，アイディアが生まれたらさらに書き加えていった。

第５ステップ：カードを分類する

①カード集め

全部貼り出したら，近い感じのカードを集めた。はじめはほんの2,3枚ずつから始め，全員で話し合いながら分類上の位置関係を修正した。位置関係がほぼ固まったところで分類した。

②表札（タイトル）づくり

カードのグループに「表札（タイトル）」をつけた。「突然の音が苦手」，「デリケート」，「他害が減ってきている」，などが表札になった。

第６ステップ：文章化してみる

模造紙にできあがった表札を全員で見合った。また，問題解決ないし目標達成に向けての方針をできる限り文章化して発表し合った。

３．ブレーン・ライティング法による事例研究の結果と考察

ブレーン・ストーミング法においては，全員が平等に発想でき，たくさんのアイディアがでる。また，集団を強く感じさせる技法であり，特にお互いによく知り合っていない集団で効果が高いと考えられる。今回の事例でも，グループを構成する全員が発言をし，その後のカードの分類における話し合いも，活発に意見交換されていた。

しかし一方で，あるグループでは，発言力のある人がその場のイニシアティブをとる場面があった。ブレーン・ライティング法では，個人の意見や課題解決のアイディアが阻害されることがないことが特徴であるが，第５ステップのカードを分類する段階で，「誰だ，このカード書いた人，～さんはこんなことしないよ」という発言があったり，話し合いをしないで表札（タイトル）づくりをしたりする場面があった。ブレーンライティング法では，各自の意見を出し合うことまでは確実にシステム化されているが，カードを分類する段階では，その場での進行役が注意して運営するか，グループ内で「様々な意見を尊重する。批判は絶対にしない」ことを確認して取り組む必要があるだろう。また，本事例では，テー

マを「～さんの実態」としたことから，３学年の生徒を対象にしたグループ内には教師間の実態把握がすでに確立していた可能性がある。３学年のグループには，違うテーマを設定して取り組んでもらった方がよかった可能性がある。

参加者からは，以下のような質問や感想が寄せられた。ブレーン・ライティング法の特徴にそって，以下のように整理した。

⑴　問題となっていることや，課題がはっきりしない時，それを明確にすることができる。
・生徒の全体像が明らかになった。
・子供の実態が，見事に整理されたと思う。

⑵　発言が苦手な人や，発言の多い人に圧倒されることなく，全員が参加できる。
・意見を出し合うことで，新しい視点や課題が見えてきた。
・口頭（普段の会議）よりも意見を出しやすかった。
・一人では整理しきれないことなどに役立つと思う。
・全員の意見が出たので普段の会議（特定の人しか発言しない）より，はるかに有意義だった。

⑶　カードの分類などをグループで取り組むことによって，衆知結集の効果や，チーム作りの効果を期待できる。
・年度途中から臨時職員として来ているが，いつもは他の教員の意見を聞く側だった。しかし今回は私自身もたくさん意見を話せた。また，事例生徒の新たな発見もあった。

４．今後の課題

課題となる意見は，以下のとおりである。
⑴　疑問，困難に感じたこと
・全く対照的な意見が出てきた時に，どうやって整理するのか。
・表札づくりの際に，生徒を全く見たことがないなど，実態をほとんど知らない人ができるのか疑問です。
・対象にした生徒をもっと深く知っている人が多く参加した方が役に立つと思う。
・２時間という時間が長かった。
・時間的な効率面から考えると現実的には実施は難しい。

⑵　今後の課題となること
・モヤモヤした部分や意見が分かれたものを，今後は検討すべきである。
・カードを書く時点では，自由に書けて，いろいろな意見が出てくると思うが，まとめるところでリーダーシップをとる人の影響が大きくなってしまう。
・テーマについて，自信がないと（今回の場合，事例をよく知らないなど）書きづらい面がある。テーマ設定が重要。
・目標設定には非常に役立つと思ったが，課題の明確化につながることは実感できなかった。
⑶　テーマ設定（今回は「～さんの実態について」）に関する問題＞
・事例の実態把握をテーマにしたことが指導計画向けではなかった。再確認に終始した感がある。
・いろいろな問題点の情報を収集することに活用できると感じた。もっと問題点となることをしぼって行うとよかった。
・今回は，実態把握になってしまったが，問題点をしぼることで個別の指導計画に生かせるような気がする。
・実態は一つのはずなのに，いろんな意見が出てきて収集がつかなくなる可能性がある。個別の指導計画に役立つよりも，かえって足かせになるのではないか。

今回の事例では，グループの構成が通常のクラス編成とほぼ同様だったため，通常の関係性を打破することができなかった場面も見られた。今後は，関係性が希薄なグループでの事例と比較してブレーン・ライティング法の効果を十分に生かす必要があるだろう。あるいは普段の関係（発言力の強い人やそうでない人）を事前に調査して，ブレーンライティング法を用いた場合にどう関係が変化するかなどを比較検討する必要がある。

参考文献
１）吉田新一郎（2000） 会議の技法．中公新書．